

原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

【概況】◆No1778=近畿圏推定, No2443=推定 長期継続前兆=継続中 本文参照。
◆関東, 東海, 東南海, 南海等領域での顕著大型地震が推定される前兆=識別できません。観測されておりません。
◆

No1778 近畿圏地殻大型地震の可能性推定前兆 続報
前兆継続事実から2013年6月22日初現認識は誤り →2013年4月24日初現の可能性で再考

2008年7月初現で継続出現したNo1778前兆群は、2014年05月現在までの間に7個のステージ(前兆群)が現れました。現在は第7ステージ認識です。第7ステージは2013年11月07日(又は11月05日)にCH15の連続BF(PBF)前兆集中出現を極大認識しております。その他に明確な前兆極大もなく(その後に出現した前兆は別大型地震No2317B + No2443認識で実験観測情報で継続報告中), 新たな前兆出現開始も無いことから、現在の第7ステージが最終段階である可能性が示唆されます。

この第7ステージが最終段階である場合は、第7ステージが示す時期が対応地震発生時期となりますので、極めて重要となります。第7ステージが示す時期を求めるには、極大が明確であることから、前兆の初現が明らかとなれば、時間変化経験則前兆初現~発生(Tfap) : 前兆極大~発生(Tmap) = 20 : 13 経験則から、前兆初現~極大 : 極大~発生 = 7 : 13 を使用して求めることが可能です。

そこで、第7ステージの初現が重要となります。しかし、第5ステージ、第6ステージと段階的变化をしながらも、断続的に出現している観測装置の前兆もあることから、第7ステージの初現認識が難しいのが現状です。

前情報段階まで、2013年6月22日(CH16)を初現の可能性と考えてみた次第です。下図のAの位置。しかし、この時期が初現である場合は、極大=2013.11/7 認識に対応させますと、5/16±に前兆が終息することが下の経験則から計算できます。

前兆極大~発生(Tmap) : 前兆静穏期(Tpp) = 3.9 : 1 経験則 現実には、本日5月20日現在、まだ前兆は下図のとおり継続中であることから、この認識が誤りであることが明確です。本日現在前兆が継続出現していることから、7月26日以前に対応地震が発生する可能性は完全否定できます。

更に逆上って、各ステージの中で、次のステージの極大時期を示す関係に関係なく、複数の前兆が揃って出現し、継続しているのは、下図のとおり、2013年4月24日と認識されます。この4月24日を初現、11月7日を極大と認識して、前述の時間変化経験則(Tfap:Tmap=20:13)で計算しますと、本年11月8日±を示すこととなります。(11/5が極大の場合は11/2±を示す)これが正しい場合には、静穏期Tpp=約93日±と計算できますので、8月7日±に前兆が終息する計算となります。現在の前兆が実際にはいつ消えるかで再計算しますが、8月6日±迄、継続出現する可能性有。また続報させて戴きます。

